

聖書：ルカ 2：13～14

説教題：神に栄光、地に平和

日時：2019年12月22日（クリスマス朝拝）

先の「子どもにも分かりやすいお話」では2章8～20節から、特に羊飼いに焦点を当ててお話ししました。この説教では夜空に現れた天の軍勢の賛美に焦点を当てて見て行きたいと思います。これはいわゆる「グロリア」という名で呼ばれる有名な賛美です。讚美歌の106番、新聖歌の78番に「荒野の果てに」という賛美がありますが、その折り返しの「グロ～リア、インエクセルシス、デ～オ～」は、まさにこの2章14節の一行目を歌ったものです。この天使たちの賛美は大きく二つの部分に分けることができます。一つは「いと高き所で、何々」、もう一つは「地の上で、何々」。つまりここではイエス・キリストの誕生が「天」と「地」において持っている意義が歌われています。そして今朝改めて心に留めたいことは、この二つはセットで考えられなければならないということです。天における神の栄光と地の上における平和は切り離して考えられてはならないということです。

さて私たちはこの二つの内、どちらに関心を持つでしょうか。多くの人は「地の上で、平和が～」という後半の方に思いを向けるのではないのでしょうか。それは地に住む私たちにとって自然なことかもしれません。ところで「平和」とは何でしょうか。多くの人に「平和とは何ですか」と尋ねたら、どんな答えが返って来るでしょう。おそらく一番多いのは「戦争がないこと」ではないのでしょうか。確かに戦争があったら平和ではありません。では戦争がなければ平和なのではないのでしょうか。イエス様が誕生された当時は「ローマの平和」と呼ばれる時代でした。初代皇帝オクタヴィアヌスが戦国時代に終止符を打ち、地中海世界に秩序が回復しました。ローマ帝国の確立です。そんな時代に御使いは「地の上で、平和があるように！」と歌ったのです。このことは「ローマの平和」と呼ばれる時代でも、本当の意味での平和はそこになかったということです。私たちのことを考えてみてはどうでしょうか。元号が令和になり、平成の時代には戦争がなかったと言われます。令和になってもまだ戦争はありません。では私たちに平和はあるのでしょうか。個人の生活ではどうでしょう。様々な人との争い、仲違い、確執、まさに戦争にたとえられる状態があることはないのでしょうか。その心の中はどうでしょう。聖書の「平和」は「平安」と同じ言葉ですが、私たちの心に平和また平安はあるのでしょうか。それが欠けているために、そこから平和のない様々な人間関係が生み出されていることはな

いでしょうか。

そんな私たちに対して、このクリスマスは真の平和をもたらす出来事であると歌われています。しかし先に見ましたように、私たちはいきなり「平和」から考えてはなりません。「地に平和」は、先に語られている「神に栄光」の部分と結び付いています。この最初の部分を読み飛ばして、ただ二つ目の「地に平和」を考えようとする、その平和は人間中心的なものになります。そして人間の力で作る平和は簡単に壊れます。大事なはこの平和を「神に栄光」と歌われている一つ目のこととセットで考えることです。この平和を考える上で決定的に大事なことは神の素晴らしい栄光の働きであることを、この御使いの賛美は私たちに教えてくれるのです。

さておびたしい天の軍勢が現れてまず歌ったことは「いと高き所で、栄光が神にあるように」というものでした。御使いたちはいつも神のみそばで神を賛美しています。その彼らも、クリスマスの出来事に接して、特別な驚きをもって神をたたえずにいられません。彼らは驚くべき神のみわざをどこに見たのでしょうか。それは神の御子であるイエス様が貧しい人となって飼葉桶に誕生されたお姿にでしょう。ピリピ人への手紙2章6～8節：「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」 イエス様は神であられる方なのに、神にふさわしい在り方をわたしは捨てられないとは考えず、その栄光を脇に置かれました。そして一個の無力な人間となってこの世に誕生されました。これは御使いたちにとって信じられないようなことでした。この世界を造られた創造者なる神が人の手で世話されなければ生きていけない一個の赤ん坊として生まれた！しかも立派な宮殿や整った施設にでなく、家畜の臭いが立ち込める、決してきれいとは言えない飼葉桶の上に。なぜこんな生まれ方をなさったのか。それは今の御言葉にあったように、やがて十字架にかかって私たちの代わりに死ぬためです。その目的のもとに誕生した方として、神であるイエス様は最初からこの状態で生まれることを良しとなさった。この姿を見て天使たちは驚きを持って神を賛美せずにはいられなかったのです。御使いは人間がどんな悲惨に落ちているか良く見えています。自分の罪のために自分で自分を救えない、どうしようもない状態に陥っている人間たち。決して魅力的な存在ではありません。ところがそんな罪人たちのために全能者がご自分がかがめて一個の赤ん坊として家畜小屋の中にお生まれになった。しかもそ

のいのちをやがてささげるために。このお姿を見て天使たちは心からの驚きと感嘆の思いをもって神を賛美せずにはいられなかったのです。

それにしてもなぜ神の御子が、このように誕生しなければならなかったのでしょうか。他の方法はなかったのでしょうか。答えはこれ以外方法はなかったということでしょう。罪を犯した私たちは一人一人、その報いとしての罰を受けなければなりません。そんな私たちが救われるとしたら、全く罪のない聖い人が私の代わりにさばかれるしかありません。そして仮にそんな人がいても、その人は一人分の身代わりしかできません。これまで存在した無数の人々を救うには、それだけ聖い人が無数に必要とされます。そんなことは望めないことですし、聖書はただの一人も神の前に聖い人はいないと言っています。とすれば神に残された方法は一つ、それは聖い一人子の御子を人として地上に送ることだけでした。その方が人となってささげるいのちは無限の価値を持ちます。神である方の犠牲だからです。しかしそれを行うことはとてつもなく恐ろしいことです。そこには多くの戦いが必要とされ、また無数の人々を救うための計算できないような苦しみが必要とされます。ですからイエス様は十字架上で叫ばれます。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と。そこには私たちが永遠に極めつくすことができない、御子が支払われた犠牲の大きさが示されています。

しかし私たちが聖書から知ることは、神はこのラストカードをご自分から進んで使ってくださいということ。不平を鳴らしながら、渋々ではなく。神が私たちを愛して、ご自分の大切な一人子さえも惜しまずに与えてくださったことは私たちにとって大きな慰めです。神はこの約束をずっと前から語って来てくださいました。アダムとエバの墮落直後の創世記 3 章 15 節から始まり、旧約聖書の至る所で繰り返し語られて来ました。その約束がついにこのような形で実行に移されたのを見て、天使たちはすべての栄光を神にささげて御名をほめたたえずにはいられなかったのです。

さてこの神の栄光のみわざと、後半の「地の上での平和」の祝福は結び付いています。ここで歌われている平和はどんな平和でしょうか。それは第一に神との平和です。生まれながらの私たちが持っていない平和です。なぜ私たちはそれを持っていないのか。それは私たちが罪を持っているからです。罪が聖なる神との関係を阻害しています。むしろ私たちは「御怒りを受けるべき子ら」と聖書で言われています。ここにまず平和がありません。しかしこの時誕生したイエス・キリストのやがての十字架の犠牲を通して、

この方を信じる者の罪は赦され、その人は「神との平和」を持つ者とされます。この神との平和を持つ時、私たちの心には大いなる平和また平安が訪れます。これをいただくまでは私たちはいつも不安の状態にありました。調子が良い時は神にも頼らず他の人にも頼らず、自分の力で生きていけると自信たっぷりに生活しますが、何か起きるとすぐ不安になり、心配になり、恐れる私たちです。しかし御使いは羊飼いたちに「恐れることはありません」と言いました。なぜでしょうか。それは神が御子を通して平和の関係を与えてくださるからです。神は私たちに敵対されるのではなく、平和の内にもともにいて助け導いてくださるからです。この神との平和を頂く時に、様々な状況を前にして立ち騒ぐ私たちの心は静められます。私を愛し、私を受け入れ、私とともに歩んでくださる神とともに歩む者とされたことから来る心からの平安また平和に生きる者とされます。これこそローマ皇帝がもたらすことのできない平和であり、多くの人が知らない平和であり、私たちを最も満たす根源的平和です。

この神との平和に基づいてキリストがもたらす第二の平和は人との間にも広がる平和です。私たちは神との平和を抜きにして、ただ人間同士で平和的關係を持つようとしてもうまく行きません。いくら平和に生きましょう！と互いに呼びかけ、スローガンを作ってもうまく行きません。私たちに罪がある限り、その心に平安がない限り、人との間に真の平和を持つことはできないのです。たとえ誰かと仲良くしようとしても罪の力によって相手を羨んだり、競争心に駆られたり、妬んだり、仕返しをするようなことをしたり、します。しかし神との平和をしっかりと持つ時、私たちは人と張り合って自分を救い出そうとはしなくなります。神が私を守ってくださると確信して、私としてはただ神に喜ばれるように生きよう！神が私にしてくださったように私も他の人にしよう！と導かれます。地上にある間、私たちの歩みは常に不完全ですが、それでも互いに愛し合い、赦し合い、受け入れ合い、尊敬し合うようにと導かれます。人間と人間がただ向き合っているだけでは決してできないことが、神を見上げることを通して、一人一人が神との平和に生かされることを通して、神に導かれる新しい世界に生きる者とされるのです。

そして神が御子によって与えて下さる平和は第三に造られた自然世界、周りの環境との間にも及ぶものです。この世界は神によって造られた、本来はすべてが美しく調和した世界です。しかし人間が罪を犯したことにより、その呪いをかぶっていると聖書は説明します。様々な自然災害や天変地異もその現れです。しかし人間が本来の正しい状態

へ回復されることを通して、この世界も本来の栄光に満ちた状態を取り戻す。ローマ人への手紙8章には被造物も本来の輝かしい状態へと回復される日をうめきながら、首を長くして待ち望んでいると記されています。またイザヤ書11章6～9節：「狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巢に手を伸ばす。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。主を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。」 信じられないような平和の関係です。狼と子羊、豹と子やぎ、あるいは乳飲み子とコブラといった絶対に折り合わないような存在同士が仲良く生活します。そのようにすべてが本来の状態に回復されて、争いや敵対関係のない素晴らしい平和の日が来るのです。

私たちはこの平和の祝福に生きたいでしょうか。そのための秘訣は、「神に栄光」という先に述べられた賛美と切り離さないことです。私たちは御使いたちとともに神の栄光の働きをまずしっかり見つめて、心から神を賛美する者とさせられたいと思います。神は大切な一人子の御子を、私たちへの愛のゆえに、無力な赤ん坊として生まれさせてくださいました。それはこの方のやがての十字架を通して私たちの罪の負債をすべて消し去り、滅びから救い出して下さるためでした。この神のみわざに心から感謝し、御子により頼む時、私たちは神との平和の内に生かされる者となります。その平和は周りの人間関係、さらには自然世界との関係にも広がって行くものです。私たちも天使の声に合わせて心から「栄光がいと高き所で神にあるように」と賛美したいと思います。そしてそお神が与えてくださる真の平和の祝福に生かされ、神の約束が最終的に実現する栄光の日へと向かう、望みに満ちた歩みを導かれて行きたいと思います。